資料６　第 2,3 回遣隋使の記録

	「隋書」		「日本書紀」 （井上光貞監訳、中公文庫版）
	原文（Wikisouce）	書き下し（藤堂明保他訳注、講談社学術文庫版）	
第 ２ 回	大業三年其王多利思北孤遣使朝貢使者曰聞海西菩薩天子重與佛法故遣朝拜兼沙門數十人來學佛法其國書曰日出處天子致書日没處天子無恙云云帝覽之不悅謂鴻臚卿曰蠻夷書有無禮者勿復以聞	大業三年（607）、其の王、多利思北孤、使いを遣わして朝貢せしむ。使者曰く、 「聞く、海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと。故に遣わして朝拝せしめ、兼ねて沙門数十人来たりて仏法を学ばしむ」と。 其の国書に曰く、 「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや云云」と。 帝［煬帝］、之を覧て悦ばず、鴻臚卿［外務大臣］に謂いて曰く、 「蛮夷の書、無礼なる者有り。復た以って聞する勿かれ」と。	（推古一五年 607）秋七月の戊申の朔庚戌(三日)に、大礼小野臣妹子を大唐（隋）に遣わした。鞍作福利を通事(通訳)とした。
第 ３ 回	明年上遣文林郎裴清使於倭國度百濟行至竹島南望躭羅國經都斯麻國迥在大海中又東至一支國又至竹斯國又東至秦王國其人同於華夏以爲夷洲疑不能明也又經十餘國達於海岸自竹斯國以東皆附庸於倭倭王遣小徳阿輩臺從	明年（608）、上、文林郎［秘書官］裴清［裴世清］を遣わして倭国に使いせしむ。百済を度り、行きて竹島に至り、南に躭羅国［済州島］を望み、都斯麻国の、迥かに大海の中に在るを経。又東して一支国［壱岐］に至り、また竹斯国［筑紫］に至り、又東して秦王国［不明］に至る。其の人華夏［中華］に同じ、以って夷州［台湾か］と為すも、疑いは明らかにすること能わざる也。又十余国を経て、海岸に達す。竹斯国自り以東、皆倭に附庸た	(概要) （推古十六年 608）四月、小野妹子が、大唐の使人裴世清らを伴って筑紫に到着した。天皇は、難波吉士雄成を遣わして、大唐の使人裴世清らを召し、唐の客のために新しい館を難波の高麗館のそばに造った。 六月、客人が難波津に到着した。飾り船三十艘で客人たちを江口に迎え、新造の館に落ち着かせた。中臣宮地連烏摩呂らを掌客（接待係）とした。このとき妹子が、唐の帝（煬帝）か

	數百人設儀杖鳴鼓角來迎後十日又遣大禮哥多毗從二百餘騎郊勞既至彼都其王與清相見大悅曰我聞海西有大隋禮義之國故遣朝貢我夷人僻在海隈不聞禮義是以稽留境内不即相見今故清道飾館以待大使冀聞大國惟新之化清答曰皇帝德並二儀澤流四海以王慕化故遣行人來此宣諭既而引清就館其後清遣人謂其王曰朝命既達請即戒塗於是設宴享以遣清復令使者隨清來貢方物此後遂絶	り。 倭王、小徳阿輩台を遣わし、数百人を従え、儀仗を設け、鼓角［角笛］を鳴らして来り迎えしむ。後十日、又大礼哥多毗［額田部連比羅夫］を遣わし、二百余騎を従え郊労せしむ［郊外まで出迎え労う］。既にして彼の都に至るに、其の王、清と相見て、大いに悦びて、曰く、「我聞く、海西に大隋有り、礼儀の国なり。故に遣わして朝貢せしむ。我は夷人にして、僻りて海隅に在り、礼義を聞かず。是を以って境内に稽留して、即ち相見えず。今故に道を清め館を飾り、以って大使を待つ。冀わくは大国の惟新の化を聞かん」と。 清、答えて曰く、 「皇帝の徳は二儀［日月、天地］に並び、沢［恩沢］は四海に流る。王、化［教化］を慕うを以って、故に行人［使者］を遣わし、此に来り、宣べ論さしむ（皇帝は使者を遣わしてこの国に来させ、ここに宣べ諭させるのである）」と。 既にして清を引いて［案内して］館に就かしむ。其の後清、人を遣わし、其の王に謂いて曰く、 「朝命は既に達せり、請う、即ち戒塗［旅支度］せよ」と。是に於いて、宴を設け享して以って清を遣わし、復た使者をして清に随いて来りて方物［土地の産物］を貢せしむ。此の後、遂に絶ゆ。	ら授かった国書を百済人に奪われたと奏上した。群臣はこれを責め妹子を流刑に処したが、天皇は勅して赦した。 八月、客人が京（飛鳥）に入った。飾り馬 75 匹を遣わして唐の客人を海石榴市の路上に迎え、額田部連比羅夫が挨拶のことばを述べた。客人を朝廷に召し、使いの趣旨を奏上させた。信物を庭上に置くと、使の主裴世清は、みずから国書を捧げ持ち、両度再拝し、使の趣旨を言上して起立した。国書には、 ・皇帝から倭皇にご挨拶申し上げる。 ・自分[皇帝]は天の命を受けて地上に君臨しその徳を広めることを願っている。 ・あなたが海の彼方の国にあって国内が平和で、誠意を尽くして朝貢してきたことを嬉しく思う。 ・裴世清らを遣わして自分の気持を伝えるとともに、別にあるとおり、信物をお送りする。 などと記されていた。そこで阿倍鳥臣が進み出てその国書を受け取り、進むと、大伴囓連が迎え出て国書を受け、大門の前の机の上に置いて天皇に奏上し、終わって退出した。このとき、皇子や諸王・諸臣は、金の髻花を頭にさし、衣服に錦・紫・繡・織および五色の綾羅を用いた。 九月、客人たちを難波の大郡(接待用の施設)で饗応した。裴世清が帰途についた。小野妹子臣を大使、吉士雄成を小使（副使）、福利を通事として随行させた。天皇は唐の皇帝に挨拶のことば、 「東の天皇が、つつしんで西の皇帝に申し上げます[東天皇敬白西皇帝]」をおくった。

			このとき唐の国に遣わされたのは、学生の倭漢直（やまとのあやのあたい）福因、高向漢人玄理（たかむくのあやひとげんり）ら、学問僧の新漢人日文（にちもん）（僧旻（みん））、南淵漢人請安ら、あわせて八人である。 （推古一五年 607）秋九月に、小野臣妹子らが大唐から帰国した。ただし、通事の福利だけは帰って来なかった。